

## 平成23年度第4回宮城県産業教育審議会 記録

- 日 時 平成24年2月21日(火) 10:00~11:30  
○会 場 県庁9階 第1会議室  
○欠席者 東北リコー株式会社 副本部長 上野 正道 委員

- 1 開 会
- 2 挨拶 宮城県教育委員会 教育次長
- 3 議 事 (1) 最終答申案の検討について  
(2) その他
- 4 閉 会

### 議 事

白石委員より、「資料2」最終答申案の変更部分について説明したのち、審議を行った。

### 審 議

橋本委員：産業構造が変化している中で、今回の答申がこのまま、10年後も同じ内容で行くとは思えない。次の見直しはいつ頃になるのか？

高校教育課長：産業教育審議会は法令で設置が義務づけられているものなので、毎年少なくとも1回は審議会を開く予定である。震災からの復興が着実に進んでいるかどうかも含めて御報告をする必要があるので、各委員の方々からの御意見を引き続き賜りたいと考えている。

佐藤委員：農業の現状について9ページ〇の2つ目について、原発事故の放射能について記述して欲しいと思う。併せて、10ページのところで、安全・安心な農産物の生産という点、環境にも人にも優しい農産物ということも取り上げて欲しい。

本図委員：今回の答申は県外からも注目されると思いますので、学校の所在地、例えば農業高校であれば農業高校（名取市）という表現を入れていただきたいと思う。

大泉会長：震災に伴って、産業系の高校が貢献した事例などを高校教育課で把握しているのか。

高校教育課長：例えば工業高校では、工業校長会に要請して支援部隊を派遣してもらうようお願いした。海水に浸った機械を復旧するのに技術の協力をお願いした。全県的に、可能な限りの支援をお願いし、生徒のボランティアまで入れると万単位で人が動いた。

白石委員：9月から仮設校舎で学校生活を送っているが、震災前にお世話になっていた閑上地区などに農産物を持っていくなどの活動をした。また、内陸の小牛田農林などは東松島市でボランティア活動を行った。本吉響高校では地域のために休遊地を有効に活用することも考えている。全県的・全国的に支援をいただき絆が深まり、来年、再来年と恩返しをしたいと考えている。

船渡委員：交通の便の悪いところから通学している生徒や下宿している生徒も多数おり、被災した保護者に対しての支援をお願いしたい。

高校教育課長：平成23年度は6,000人程が月二万円の奨学金の給付を受けている。

民間からの様々な支援もいただいている。学校の現状を把握し、一人一人に応じた対応ができるようにしたい。

大泉会長：民間でもいろいろな支援があり、宮城大学でも孤児になった生徒・学生の支援の仕組みを民間企業と一緒に考えている。他にも様々な支援があるので今後も紹介してもらいたい。

他の高校との連携や地域の関係団体との連携が書かれているが、地域との関係が密になってきている様々な事例があると思う。様々な築かれた関係について、実態として表示すると、次の施策を考えていくのに役立つと思う。具体的な連携が示されると良いと思う。この答申との関わりも深いことだが、震災復興プロジェクトとして何ができるか？8ページには防災に重点を置いた教育を新たな分野として検討するとあるが、新たな分野として何があるか？ボランティア教育も一つだと思うが、新しい学科はどういうものが必要か？産業教育は1次産業から3次産業まで幅が広いので、通り一遍の議論ができないからこそ事例があるとありがたいと思う。

平本委員：意見として、7ページの○3つ目について、教員の研修と施設設備の拡充ということで継げて書いているが、教員研修と施設設備の充実は切り離して書いた方がはっきりするのではないか。もう一つは、卒業生の進路、産業界に卒業生の受け皿をつくるということと、それをしながら同時に高等教育を学びたい生徒に、奨学金などの制度や仕組みについても、今後の施策に向けてお考えいただけると良いのではないかと思う。

大泉会長：農業高校から就職するとなると、どのような分野になるのか？

白石委員：これまでは製造分野に入る生徒が多かった。今年は震災枠ということもあり、内定率は昨年比で24ポイントも改善している。学んだことを生かして、将来にどのように継げるかということでは、即戦力になるというのは各校1・2名しかいないが、研修先で自分の進路が変わったりする生徒もいる。

大泉会長：例えば小牛田農林高校などは、仙北地域のリーダーを輩出してきたが、徐々地域との関係が薄くなってきている。今後の方向性に関係することなので、例えばインターンシップをするには受け皿としてどこに行くのか。水産高校などはどうなっているのか？

船渡委員：船にのる場合に、操縦するコースと動かすコースの二つがあり、宮城県では宮城丸で実習教育を受けて、東太平洋で魚を獲る現場を経験して帰ってくることが、技術を覚えるという側面と船での団体生活を通して人間関係を学ぶということに意義がある。いつも問題になるのは、日本の水産業界にあっては、技術的なコースに乗せる、例えば機関コースを学ぶには法の問題もあり、何年か現場で働いて戻ってきてから、海員の専門コースを学んでから立派な船員になっていくのが一般的であり、その辺の充実を盛んに言っている。水産高校に入学しても、維持するのはお金がかかり現実的ではないので、

業界にお任せするのが現実である。今は、日本の船には、日本人よりも外国人が多く乗っているという姿になり、業界としては卒業後の進路として、船に乗って魚を獲ってもらいたいと思っているが、現状はそうになっていないというのが問題である。

白石委員：関連学科は人気があり、出口もしっかりしている。個別の農家では就職したり自営したりするのが難しい。これからは法人化の中で、地域の農業を引っ張っていく、地域のリーダーになる人材が要求されるということになるので、大学や研修で資質が磨かれると考えている。

大泉会長：一般の答申で課題を挙げたつもりだが、まだまだありそうである。例えば農業高校のカリキュラムなどで関連業界との関係をつけた改革をしていくことと同時に県内の農業高校全体で改革していくことも大切だと思う。高等教育との関係、農業大学校、宮城大学の食産業学部、東北大学の農学部との連携ができないものかと考えている。専門学校についても園芸などもできており、それぞれ分断されており、これから考えていかなければならない部分だと思う。

塩村委員：産業界との連携や高等教育機関との連携など、新しいモデルがつくれるのではないかと思う。モデルとして全国に発信していくという点の強調が薄い感じなので、積極的にアピールしていいと思う。2点目は、小中学校からのキャリア教育で産業にも興味を持ってもらえるという広がりがあると思う。農業高校、水産系高校の現状が書かれているが、今年が一番新しい状況は入らないのか？

高校教育課長：資料は昨年3月卒業生の状況であるが、24年3月卒業生の状況を載せるのは厳しいと思う。

塩村委員：就職だけでなく、受験生や入学生についてはどうか？予測としてはどのような状況にあるのか？

高校教育課長：現在は予備調査の段階であり、入試の結果は3月になるので資料としては取り入れるのは難しい。

白石委員：宮城県農業高校は全国の農業校長会や農業クラブの指導者研修会で話題提供をして欲しいという依頼がある。全国から本県の取り組みが注目されていると感じているので、全体からバックアップを受けているということを発言してきたいと思っている。

高橋委員：志教育のところであるが、生徒の志教育ということだけでなく、取り組みの体系化ということを考えると、先生方を含めて志教育をしていくと良いと考えている。

大泉会長：志教育のところは、理念的な話であり、宮城県の教育全体についてのことであると思う。

高校教育課長：知識が知恵に変わるということはその通りであり、何らかの形で文言が追加できれば入れてみたい。学校教育全般では活用型の学力が要請されており、そのことはPISAの調査などでも明確に示されており、また、全国学力状況調査でも明らかになっている。志教育は教員がしっかり取り組まなければならないものであり、研修なども準備されているので、書き込みができれば入れていきたいと思う。

大泉会長：志教育については、一度じっくりお話を伺いたい。知識基盤社会という言葉は、

中教審答申でしか出ていない言葉で、通常、経営学では知識社会とか情報化社会というドラッカーやダニエルベルガーの使った言葉を用いている。職業観・勤労観は志教育の中では重要なのか、それらをどう教育していくかというときに、高校の先生方の研修が必要だということだが、どのように教育していくか。マックスウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」というのを書いており、その中で資本主義の精神は何なのか、利潤を得るには社会的に有用な仕事を一生懸命することが大切で、その結果利潤が出るのであって、社会の職業観・勤労観のベースになっており、プロテスタントだけが形成できるかといっているが、日本でも二宮尊徳などもそうだが、勤労観・職業観は哲学として大切で、目の前の仕事に対して一生懸命するというのが、今の専門高校に問われているのであり、地元企業でのインターンシップで中小企業の社長などはそういう気持ちをもっており、生徒を地域や会社に出してやるのが、精神醸成の重要なきっかけになると思う。そういったことから地域や関係団体との関係が大切になり、高等教育との関係、連携というより絆といった方がよいとも言われるが、宮城県の高教教育の課題として今後も煮詰めていって欲しい点だと思う。

白石委員：前回の審議会では佐藤委員から、農業を熱く語れる教員が必要であるという話があった。生徒の教育も大切であるが、生徒を引っ張る教員が大切であると感じている。インターンシップなどを仕掛けるのは教員であるので、優秀な教員を宮城に連れてこなければならぬ状況になっている。母校に帰って盛り上げるような教員を育てなければならぬと考えている。若い教員は震災を通して、何かできるのではないかと考えており、追い風が吹いているので頑張っていきたい。

平本委員：7ページの実務的・実践的な研修と書いている前に、課題解決学習を基盤としたというような文言を入れることは可能か？方法論についても入れた方が、今の教育の方向にあっているかと思う。

大泉会長：教育ソースは結構あり、卒業生は、教育資源として結構いて、宮城大学でも、食産業学部の前進の宮城県農業短期大学の同窓会を上手く機能させて教育に生かさないかとも考えていた。生徒に将来を見せることができるかどうかは、大きな違いがあり、宮農をはじめ伝統のある学校ばかりなので、人脈を使って教育するという事は志教育を具体化するという点では大事なことである。

教育次長：志教育について話をしたいと思う。数年前から、学校現場に熱い気持ちをもった方に、直接学校で語っていただくという取組は数年前から行っており、NPOの協力もいただきながら、毎年事業化をして進めており、学校数が増えてきているところである。それらを併せて、学校の教員だけでは全てをカバーしきれないところもあり、先生方の志を高めることも同時に行いながら、学校の先生方以外のいろいろな教育資源を使って生徒たちに社会との関わりをより実感させながら、人の役に立つ、そのことに価値があるということをしっかりと教育したいと考えている。人の役に立つことが大切である。震災の厳しい状況の中、生徒は大きくたくましく成長していると聞いている。自分も人の役に立つということがわかって大きく成長しているということで、志教育のキー

ワードがあると思っている。小学校からの発達段階や、特別支援のハンディを持った子どもたちにとってどう進めていくかも課題であるが、これまでは自分探しということで、自分の内面で将来を考えるということでしたが、外のとの関係で世の中の役に立つということを考えさせて行きたいと考えている。

本図委員：今後、志教育を考えたとき、3つの方針の中でも「はたす」ということ、高校生がどんな企画をして実行してきたかを、「はたす」という目に見えた企画をしたことを教育委員会の支援がないと、学校だけでは発信できないので推進して欲しいと思う。

橋本委員：今回の答申のタイトル（復興）はいつまでも使ってはいけないと思う。2月に学校基本調査の結果が出た。大学よりも専門学校の進学率が若干増えたが、専門学校の中でも分野別で上がり下がりがある。専門高校も時代の流れで対応せざるを得なくなるはずで、今後、将来に向けて柔軟にお願いしたいと思う。進学が7割を越えており、その流れからすると、専門高校卒業生も進学が増えると思っているので、指導はさらに大事になると思う。

間庭委員：最終答申案については良くまとめていただいたと思う。この答申を着実に実施して行くには、この震災が起きてしまって、水産業や農業などを再生しなければならない、生きた現場があるので、ただ元に戻すのではなく以前より良く戻すということを考えて、身近に生きた素材があるので、そういうところを継いで千年に一度の学びの機会ととらえ、担い手となって地域の再生を担って行って欲しいと思う。

犬飼委員：前回、教員の資質について意見を申ししたが、先生方でできない部分は地域の企業や実務経験者の登用などについて盛り込んでいただき、今後の農業の目指すべき方向性などにも盛り込んでいただいたので、できれば最後のまとめのところでも、引用いただければと思う。

塩村委員：障害を持った、いろいろな意味でハンディを持った方の教育も職業教育に関係が深いと思うが、この答申には入れていただけるのか？

高校教育課長：障害を持った方については、特別支援教育という形で別の審議会や構想が進められているので、その中では学校を卒業してからどうするかということが話題になるので、特別支援教育室と連携を取らせていただきたいと思う。

大泉会長：地域との連携を進めていく上で、個々の先生方だけでは大変なことになるので、何か窓口をつくらなければならないと思う。6ページ以降に関する内容については大分御意見をいただいたと思うが、さらに入れていただきたいことがあればお願いしたい。

佐藤委員：7ページの義務教育段階からの学習が定着していない生徒については学び直しの機会を確保するとあるが、表現について課題認識があつてのことだと思うが、前段の部分と落差があるので、表現を変えられないか検討してほしい。

橋本委員：普通高校については、学び直しをしているとあり、専門高校では必要ないのかという質問を受けて入れていただいたと認識している。表現については工夫が必要かもしれない。

大泉会長：最終答申案についていろいろな御意見をいただいた。あとは私の責任において

調整させていただいて、この審議会から答申をするということにさせていただきたい。